

佐原 作品集で山口さんの過去作を拝見した時は、どことなく不穏なイメージを抱きましたが、実際に会場で観ると、あたたかく包み込んでくれるような、独特の雰囲気がありますね。表面の質感や色彩も、とても繊細です。これまでの制作と共通する部分、今回の個展で新しく挑戦された部分を聞かせてください。

山口 ふだんこは飲食をされたり、おしゃべりしたりという人が訪れて、かならずしも私の絵を観に来る人だけに限らないわけですね。そういう場所において人の視点にふっと自分の絵が入ってきて、記憶にどう働きかけるかを考えながら、自分の作品をただ持ってくるよりも、つながれる作品を選んだのだと、後から思いました。美術館やギャラリーのように、絵を観に行くぞ、という方が来る場所ではできないつながり方をするべきだと思って、リアルな日常と地続きであること、ずっと入っていくことが、自分にとって挑戦でした。

佐原 これまでは画面全体にモチーフを描く作品が多かったのですが、新作は少し引いた視点から見あげる構図で描かれていて、関心が変わってきているのかなと思いました。《花》はチューリップをもとにした作品とのことですが、どのようにイメージを作品に落とし込んでいくのでしょうか。

山口 花を描くときには作家の死生観があらわれると感じていて、自分ではまだ描けないと思っていたんです。それでずっと描かずにいたんですが、今回描けるようになったのは、ふたつきっかけがあって。ひとつはコンディショニングの問題。物語的な要素を想起させるような絵を描いていると、自分で図像をコントロールして、そこにつまとう意味を把握しなければいけない、意味を引き受けなきゃいけないような作品になりがちで、そういう理性的な仕事を根づめてやったあとには、自分の理性のちっぽけさに、いつも失望するんです。そうなったときに、物語を生む要素を排して、画面と形と手の動きだけに集中して没入できる絵を描きたいという気持ちになるんです。今回はそういうタイミングだったということ。もうひとつは、子どもが 2 歳半で保育園に通っていて、送り迎えのときに 4〜5m の高さところに花が咲く皇帝ダリアがあって、完全に見あげる角度になるんですね。それを見るといつも、花に見下ろされる感覚、花よりも自分が小さくなれることが痛快で。その体験があって、花は小さくてかわくてはかないものという固定概念を転覆できたんですね。それで描けたと思った。

佐原 最初に《花》を拝見した時、大樹のような力強い印象を受けました。実生活のなかで実際に丈の高い植物を繰り返し見た経験が、描けるきっかけを作ったのかもしれないですね。

山口 大きな花を見て自分が小さくなるような「転覆の体験」がモチベーションになっている気がして。モチーフを選ぶとき、関係性がひっくりかえるところがきっかけになることは多いんですね。《影を起こす》もそうですね。

佐原 実在と影の関係が反転する。

山口 影の方が実体を帯びはじめているような……

佐原 虚実の関係が反転するというか、実在と影が等価なものとして存在しているような感じがありますね。山口さんの作品はタイトルがユニークで、物語性を感じさせるものが多いです。タイトルは後からつけるんですか？

山口 タイトルは、いつも最後です。あまり物語的な要素を追加しないように心がけているんですけど、それでもナラティブなもの残りますね。

佐原 対照的に新作は、《花》とさっぱりしていて。作品への取り組みの違いも出ているのかなと考えたり……

山口 《花》と《草花》。自分でも思い出せないくらい、思

い入れずにタイトルをつけているんです。その 2 点に関しては、描いているときの運動に集中していて、観る人にもそういう見方をしてもらいたいために他の要素を削いでいます。

佐原 シンプルですね。《花》の白っぽい線は何ですか？

山口 あれは……何の線だろう（笑）。

佐原 壁なのかしらって思ったんですけど。

山口 コンクリートの壁の継ぎ目だった。曲線になっていて、そういうふうには見えないけど、それはいいんです。

佐原 もともと最初に下絵をつくったり、モチーフを決めてその通りに描くのではなくて、描いていくときは手の動きそのものを優先させてイメージを作っていくそうですね。

山口 まったくの空想から描きはじめることはしないです。かならずストックしている写真とか、日常で見た映像とか、記憶に残っている光景を、時間を経て、混ぜ合わせて絵の像を作っていく。それは、糠床のなかから引っ張り出すというか（笑）、有機的な変化をしている。もとなっているモチーフの像が形を変えていることも多くて、それを不穏だと言われるけれども、自分にとっては日常の延長で、同じ場所できていることのちょっと違う側面という捉え方をしています。ただ、それを描くときに画面の上で起きることはまた別の話で、自分の感情や体調もあるから、そのときの状態がダイレクトに反映される。それを均一に、波が現れないようにしようとは思っていないくて、全部反映させていますね。ただ、それが感情的だとか、内面の表現とは思っていないです。そこは客観視して、自分というフィルターを介して、多くの人が普通に体験していることが出てきたと思っています。

佐原 日常のなかで生活している山口さんと、描く身体としての山口さんが入り混じりながら、作品が生み出されているんですね。どのような描き方をしているのでしょうか。

山口 効率的に花を描くこともできるんですけど、わざわざ細くて小さな線を重ねて描いている。しかもキャンバスの裏面を使っているの、吸い込むんですよ。つるつとしていないから、何の素材を使うにしても抵抗を受けて、乗りが悪い。すごく非効率な描き方をしているんですね。だけど、それが必要だと私は感じていて。私が画面の上を、形を追って小さい線で歩くというか、じわじわ進まなければいけない。ちょっとずつしか形をつくれないう実感があるんですね。

佐原 画面の上を歩いたり、這うようにして描いているという感覚が面白いですね。

山口 本当に時間ばかりかかるんですけど、そうやって描いていると、自分の理性から離れていける。理性的なものから離れていきながら形をつくる方法として、手の動きに集中できる描き方を選んでるんだと思います。

佐原 山口さんの描く人物には、細かい線の集積が露わになっているものと、裸体のような肌色のぬるっとした人物と 2 タイプありますね。紐のような線がぐるぐると巻き付いているので、仮に前者を「包帯タイプ」と呼ぶとすると（笑）、同じ人物でも意味合いが異なるように見えます。人物を描くときの捉え方は、両者で違うんでしょうか。

山口 「包帯タイプ」（笑）の人は、画面の上で存在が形づくられている途中として描いている気がします。そうじゃない人物との対比みたいなことをしている。

佐原 実体のある人物が、線状で描かれた人物の手助けをしている気がします。《人形、男の手》は、実像側に呼び込もうとして、ケアをしているような。

山口 意識的にそういうものを描こうと意図していたわけじゃなかったんですけど、今見るとケアしていますね。

佐原 温かくてやさしい雰囲気があります。

山口 関係あるかないかわからないんですけど、出産をはさんで描いていた絵ですね。ぬるっとした人物が大きい存在なのは、ふだん意識しないと自分の役割みたいなものがどうしても日常のなかで強くなってくるので、それとは別に存在の強さはあると思って、そういうことを考えながら描きました。

佐原 山口さんの作品は描くのに時間がかかるわけですね。お子さんが生まれたりして、日常的な時間の使い方が変わって、そのなかで葛藤だったり、今までと同じようにいかないようなこともあったと思うんですけど、実際の経験が制作に反映されていると感じることはありますか。

山口 子どもが小さいときは物理的に時間がつくれなくて描けなかったし、子どもが保育園に行くようになって、ようやくまとまった時間がとれはじめて。それでもひとりで描いていたときの、好きなときに好きなだけ、身体をちょっと無理すれば描けるということではなくて、やっぱり時間は細切れになる。長時間描くことによって集中できていた、ということではできなくなるんですよ。それは自分のなかで大きな変化の要素だと思うんですけど……対応しきれてはいないですね。

佐原 たしかに油絵の場合、乾くのに時間がかかるし、制作に充てる時間の在り方が作品そのものにもかかわってくるのかなと感じます。でも結構、薄塗りですよ。

山口 厚塗りの作風だとフラストレーションたまったかもしれないですけど、待ち時間があまり発生しない描き方を昔からしているので、その点はそんなに私は感じないですね。

佐原 イメージが動きが速いと、手の動きの速度にそれほど差はないんですね。割とすぐ重ねられる。

山口 手を入れた分がそのまま像になるというか、見えないものを重ねる作業はあまりしていないので、ときどきドローイングっぽいと言われます。自分でもキャンパスに描くものとしてはドローイングよりの絵を描いていると思います。

佐原 絵画なのかドローイングなのか。たしかに山口さんの作品は油彩画を観ているというイメージがあまりなくて、ドローイングとして油絵を描くことを考えさせられる。

山口 学生のときから、キャンパスに油絵で描くことに対して、ずっと苦手意識があって、どう付き合ったらいいんだろうと自分のなかでもやもやし続けていて。それがドイツに留学しているあいだに、ものすごい数の西洋美術史上の名画を観続いているうちに、自分の画家としての身体性はこういう重厚さにはないなと納得することができましたね。

良い作品を観ることによって、これは素敵だけど、私はこれじゃないと思えた。憧れと自分の作家としての質に区切りをつけられた。

佐原 一般的な油彩画はものすごく構築的で、しっかりとした準備をしたうえで計画通りに描いていく側面が強いけれども、山口さんの作品の場合は、絵具を吸い込むキャンパスの裏面という物理的な条件のもと、動きによってイメージがつくられていくのです。

山口 画面のなかである程度想定していた形が、どんどん変わっていくことも自分の作品のうちだと思っています。《花》はチューリップがもとだったんですけど、チューリップの形をとどめてなくてもいいんですよ。

佐原 質感としては、もうちょっと硬そうな……

山口 自分のなかでは、岩を削っているような感覚もありましたね。彫刻的な、レリーフみたいな感じで。

佐原 今回お話を伺いながら、モチーフは異なっているけど、描きかたは比較的共通しているのかなと思いました。今後の作品の展開について、今考えていることはありますか？

山口 今回の新作で、特に花の 2 点のいろんな要素を削ぎ落とした感じは、手ごたえを感じました。自分の作家としての質がシンプルに出ているものとして指標になろうと思ったんですけど、そこでとどまらないように、他の人物や物語の要素とどう絡ませながら出していけるか。たぶん、理性に幻滅しながら物語のあるようなものを描くと思うんですけど。

佐原 これまでの作品の要素と、今回新たに見出した要素がどのように関わりながら展開していくのか、とても楽しみです。

山口 ありがとうございます。

(主な質疑応答)

Q：育児の日常のあいだにどう制作へ心に向けているのか。

山口 制作の現場が自宅なので、だんだん境目が薄くなって、共存できるようになっているのかなと思うことはあります。それでも子どもといっしょにいてできることばかりではないので、時間が欲しいとはいつも思っています。絵をはじめまでの準備は、自分の描くものが日常と地続きであるせいもあるかもしれないけど、あまり特別な時間を必要としないですね。その意味では、作家である自分と生活している自分が、子どもが生まれてつながりました。それまでは作家という自意識が強く、「作家である自分対世界」という極端な構図になっていたのが、いろんな角度の自分の在り方を抵抗なく制作の思考に絡めていけるようになりました。

Q：美術界における男女の意識の変化や課題の克服について。

佐原 出産や子育てによって、作家活動をペースダウンしたり、キャリアをあきらめたりするのは、依然として女性が多いです。このような問題への関心は高まっていますが、なかなか解決できていない現状があります。業界全体でその重要性を訴えていくことは大切で、例えば美術館では、収蔵作家、出品作家が男性に偏重している状態を変えていく必要があります。一般的に、展覧会はスケジュールもタイトで、子育てなどの制約がない人でも一杯一杯という状況になりがちです。慣例的に踏襲されている美術業界の仕事の進め方も、改めて見直すべきなのかもしれません。また、ジェンダーに関する発言をした作家の作品を、ジェンダーの文脈から理解しがちな点も、問題だと思っています。当事者であってもなくても、フラットに発言できる環境をつくっていききたいですね。

Q：自分のなかの男性性と女性性について。

山口 自分が女性であることを重要視しているつもりはないですが、日常を反映するという事は置かれている状況が形となってあらわれることだと思います。無意識のうちに女性的な部分が表出することを避けている部分はあるかもしれない。花を描くのを避けていたのも、女性が花を描くことの単純な構造が想像できてしまって、それに迎合する気がして描けなかったのかもしれないですね。今回、いわゆるフェミニンではない花を描けたことで、呪縛を脱することができた気がします。

Q：色の選択の仕方を教えてほしい

山口 《花》は墨汁を使っていますが、色彩で表現される花をモノトーンで描きたいという意図があったわけではなく、タッチを優先して花の像を立ち上げたいという選択でした。背景に色が入っているけれども色彩の対比はしたくなかった。わかりやすく何色という色を使いたくないと思っています。

Q：《小さい庭》は映画『ひろしま』を想起した。絵のなかの人物は、こっちを見ているようで花を見ているのではないか。咲いている小さな花と人との関係性を知りたい。

山口 私はタイトルをつけるときに日本語と英語を考えています。日本語で「庭」と言っても、他の言語では yard や garden など厳密に分けられることが多いんです。この絵は small yard で、粗末な空き地。ドイツは庭造りを楽しむ人が多くて、日本に帰ってきたら住居空間が狭くて、庭が殺伐としていた。特に東京の都市空間のなかで、自分は妊娠していて、小さな存在に共感しながら日常を送っていたんです。大人の都合でつくった環境のなかで生かされる立場の弱い存在同士が、どういつながりをもつか、みたいなことを考えて。秘密の暗号みたいな、大人が使っているコードと違うコードでつながっているという実感がきっかけになって描きました。

O JUN 言葉は万能ではないので、絵のなかに沈んでいるようなデリケートな空間や関係の問題が消えてしまうことがある。今日のトークは、絵の衝動というか、背景に近づいた言葉を選びながら話してくれて、絵を描いたり物をつくったりするときの無意識の部分が聞こえたような感じがしました。次の制作も楽しみにしています。(まとめ：岡村幸宣)